

一人の人間として

～強く、優しくありたい～

多治見市立多治見中学校三年 中村 陽海

「人権」それは、人間が人間らしく生きるためにある、誰もが当然に持っている権利のことを言う。あなたは「人権」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。差別、虐待、いじめ、戦争。様々なことが挙げられると思う。

私が、人権と聞いて真っ先に思い浮かべるのは、障害についてだ。障害者の方々にとって、現代の日本は昔に比べれば、いくらか暮らしやすい国になったと思う。それでも、障害者に対しての偏見や憐憫、軽蔑のまなざしがなくなることはない。たとえ、本人に偏見などを行っているつもりがなくても、無意識に障害者を差別してしまっている人は少なくないと思う。

実際に私もその一人なんだと実感した事があった。様々な場面で障害者の方を見るたびに、「かわいそう。」「自分は健常者で良かった。」と思ってしまう時があった。テレビに出演していた障害者の方がこう言っていた。「私たち障害者にとって、同情は差別だ。同情による助けなんて望んでいない。」と。私は、その言葉を聞いて初めて、自分があの時いだいていた感情が障害者の方にとってどれほど重く、ひどいものだったかということを知った。

「障害」という言葉について忘れられない出来事がある。小学生の頃に行われた視覚障害体験の授業だ。正直いって、私の感想は、「楽しかった」「疲れた」など、障害者への思いやりがない軽率なものばかりだった。真っ暗な視界のせいで、いつもと違うように感じる校内。友達と笑い合いながら、初めて体験する不思議な感覚にわくわくした。

そんな体験をしてから何年かたった頃。それはある春の暖い日のことだった。一人で道を歩いていると、杖を持った一人のおばあさんの困っている様子が目に入った。声をかけて、話を聞くと、おばあさんは視覚障害のため、目が全く見えない方で、今、歩いている道はいつも通る慣れた道のため一人で来ていたが、めずらしく迷ってしまい、今は階段を捜している。とのことだった。私は話を頼りに、おばあさんを階段へと案内した。階段の前に着いた時、おばあさんは手探りで私の手を捜し、優しく握り、そっと口を開いた。

「この階段、今の時期やと桜が満開できれいやろ。私も一度でいいから見てみたいわあ。何にも見えん。ていうのは悲しいし、大変やけど、あんたみたいな優し

い人に会う度、生きてて良かったなあって思うんよ。あんたの顔が見えんのは残念やけど、きっと、笑顔も素敵なんやろうな。あんたまだ若いやろ。これから辛いこと、いっぱいあると思うけど強く生きるんやよ。」そう言ったおばあさんの表情は、意外にもカラッとされていて、優しく、そしてどこか悲しそうだった。その顔を見た時、ふとあの小学校の頃の記憶が頭をよぎった。「楽しかった」「疲れた」って。私は何を言っているのだろう。「あんたみたいな優しい人…」違う。違うんだ。私は。私は……。あの記憶の中の私と友達の笑い声。おばあさんの言葉。表情。何度も、何度もぐるぐると頭の中をまわって、私の心を締め付けた。ごめんなさい。ごめんなさい。私は、優しくなんかないんだ。あなたをずっと苦しめている、真っ暗で何も見えないという事実を、「楽しかった」って。そんな軽率な一言にしてしまう。最低な人間なんだ。思えば思うほど、罪悪感はいくらもむばかりで、私は泣きそうになった。目に浮ぶ涙のせいで、ぼやけて見える階段に、もうおばあさんは見えなくて、おばあさんが言っていた通り、満開の桜が、暖かな日に照らされて、風に揺れていた。この出来事は、今でも鮮明に覚えている。そしてこれからも、忘れることはないだろう。いや、忘れてはいけないのだ。この文を書きながら、改めて強くそう思った。

さて、私はここまでの文章の中で「障害者」「健常者」という二つの言葉を使ってきた。この二つの言葉を使うことはあまり好ましくないことだと私は思う。なぜなら、この二つの言葉は、同じ人間を二つに区別させてしまう差別的な言葉だからだ。しかし、私はこの言葉を使った。これが現実なんだと伝えたかった。辞書を引けば二つは対象語として書かれている。それではだめなのだ。この言葉が存在するせいで、自分は、障害者なんだと傷つく人がどれほど多くいるのだろうか。しかし、私には、この言葉を世の中から消すことはできない。無力だって分かっている。だから私は、障害を一つの個性として受けとめ、障害者である、ないの前に同じ一人の人間として接することを大切にしている。この行動が差別のない世の中を築く第一歩だと信じているから。そう思う人が一人でも増えてほしいと思う。

あの日以来、おばあさんとは会っていない。いつかまた会えるのなら、その時は、最高の笑顔で会いたい。強く、優しい人になって。そんな思いを胸に、私は今を生きている。